

## ● 沖 縄

### 上 地 隆 裕

沖縄クラシカル音楽界ではここ数年、地高外低（筆者の勝手な造語＝地元勢の活動が主流で、本土および外国勢のそれが低調の意）状態が続いている。その理由を不況のせいとするか、または単に地元のレベルが「鑑賞に堪えるほど飛躍的に向上しているから」と捉えるかが問題だが、筆者の考えは是非もなく前者の方だ。

とはいえ地元演奏家の水準の向上にも著しいものがあり、決して侮ることは出来ない。特に本土及び外国勢と共演する時（機会はまだ少ないが）、かなりの好勝負を展開、将来に大きな希望を抱かせている。

だがそれを実現できるレベルに達しているのはやはり外国留学経験者が大半で、更に東京など本土に拠点を置き、名流プロ奏者及びアンサンブルとの共演経験の豊富な人々が帰郷する際に行う公演である。

今シーズン、本土に本拠を置く本県出身者でそのような活躍を展開した面々には、砂川涼子、砂川隆丈、上地さくら、上地実実、上原玲未、高宮城凌、高良仁美らが挙げられる。ソプラノの砂川が今や本邦楽壇のスター歌手の一人に成長したのを筆頭に、残りの面々も着実に、中央楽壇で活動の幅を広げている。

一方地元勢では、昨シーズンP・ベシュティ（ドイツのSWR響首席ピオラ）の伴奏で好サポートを見せた仲松尚子（Pf）、実演及び企画の両面で大活躍を演じた渡久地圭（Fl）らが存在感を示した。

そのようなLocal Firstのシーズンに訪れた本土勢および外国勢アーティスト（内容及び顔ぶれはひと頃よりかなり寂しいものに終始したが）の中で、ひと際大きな注目を集めたのは、反田恭平（Pf）のリサイタル（本県デビュー）。同公演はまさしく大収穫で、立ち見の出る盛況ぶり。本県クラシカルシーズンの白眉といえた。

反田に次ぐソロ公演で注目を集めたのは、NYフィルに在籍するチェロの工藤すみれ。細部まで彫琢の行き届いた秀演は、弦部の躍進が望まれる当県に格好の刺激を与えた。

続いてフル編成のプロ・アンサンブルでは、NHK響が唯一かつ久方ぶりの来県。名匠V・フェドセイエフのバトンでチャイコフスキーなどロシアの名曲を聴かせた。

室内楽の分野では、まず弦部でチェコ・フィルSQ他計3団体が来県、各々の現状を聴かせ、更に本県では珍しいバンドネオン（三浦一馬）の公演が二組も実現した。特に後者の三浦は、本県出身のトップ奏者3人（高良=Pf、渡久地=Fl、上地さくら=Vc）に2人の演舞家を組み合わせるというユニークなプログラム。本県楽壇に新風を吹き込む取り組みとして注目を集めた。

一方地元勢の公演で目立ったのは、例年同様ピアノ・リサイタルの多さ（昨シーズンの本県におけるクラシカル音楽公演は計百六十五回。そのうちピアノ独奏会は二十回）だが、二年前から各種楽器の公演も増えてきたのは喜ばしい。

各分野を俯瞰すると、まずアンサンブル界（琉球響、沖縄響、

琉球フィル、沖縄フィル、琉大管=本県唯一の大学オーケストラ、大度室内楽団、更に各地区のジュニア・オーケストラ（六団体）が順調に定期公演回数を伸ばし、レベルを上げているのが実感できた。

またオペラや合唱部門でも地道な活動の継続が見られるが、牽引役の県芸声楽出身者には企画制作にもう少しの奮起が望まれる。

最後に、本県クラシカル界を補完する試みとして行われた沖縄国際音楽祭での第九（ソロにD・テオドッシュウを招いた）公演、欧州楽都への訪問旅行、プロ・アマ混合でチームを組み、不特定多数の聴衆を対象にした「ストリート・クラシックス」等の企画が、将来に展望を拓くものとして注目された。